



杉薬師の麓、宮城県での疎開生活

杉澤 弘道さん

昭和8(1933)年5月25日、高円寺生まれ。当時は両親と妹の4人家族。

小学校5年生(11歳)で学童疎開、6年生(12歳)で終戦を迎える。

東京大学卒業後、郵政省に勤める。現在82歳。

昭和19(1944)年9月9日の夕刻、杉並第六国民学校(現・杉並第六小学校)5年生54人(男34人、女20人)は、S先生、K先生ほかの引率者とともに、親や友達に見送られて、阿佐ヶ谷駅から上野駅を経て、宮城県栗原郡築館町(現・栗原市)に出発した。学童疎開(参照▶P18)である。他の学年は、一行とは別に、仙台近くの高館村が疎開先に決められていた。なぜか5年生だけが岩手県との県境に近い町に疎開したのである。

生徒達は、上野駅から専用の夜行列車で、東北本線をひた走り、翌日の昼過ぎに瀬峰駅から轻便鉄道に乗り換えて、目指す築館駅に到着した。駅前には、大勢の町の人達が、疎開児童

したので、伐採に難儀したという伝説で知られる、由緒あるお寺である。何幅かの掛け軸に仕立てられているその縁起を、寺の住職から説明されたことは、70年後の今日でも鮮明に記憶している。杉薬師の裏は公園になっていて、後日、晴れた日の午後には、戦争ごっこに時を忘れることになった。その日は、町役場、国民学校などを一巡して終わった。



杉薬師堂で記念撮影(後ろから2列目、右から4番目が筆者)



築館駅に杉六小の学童疎開児を迎える人達

を出迎えるために集まっていた。

宿泊先は、「小野寺旅館」。その別館に落ち着いた。6畳間に4、5人の割合で、最初は男女同室の組もあったが、後に男は男同士でまとめられることになった。その日の夜は、なけなしのご馳走をふるまわれて、夜汽車の疲れに一同熟睡した。

あくる日は、町の案内とて、まず「杉薬師(双林寺薬師堂)」に詣でて、記念写真を撮った。平安の昔、時の帝が重い病に罹り、陰陽師の加持祈祷を受けたところ、東北に杉の大木が繁り、その影が宮廷にかかっているのが原因とのこと。早速、都から探索の武士が送られて、築館の地に目指す大樹を発見、切り倒しにかかったが、切口から血が流れて、一夜にして元どおりに復

■ 疎開先での生活

旅館の各部屋は、畳敷きのため、仕切りの襖を取り払って、食卓および勉強兼用の長机が作られていた。生徒はこの机で、三度の食事および、当初は授業も行われたのである。しかし、正座しての授業、また黒板等の不備のため、やがて授業は、近くの中学校を借りて行うようになった。中学生が勤労働員のため、教室が空いていたからである。隊列を組み、軍歌を歌いながら、往復したことであった。

1日の生活は、朝6時起床。床の上で乾布摩擦を行ったあと、門前の道路に出て、朝礼、宮城遥拝(きゅうじょうようはい)(参照▶P20)、ラジオ体操を行った。食事は丼飯に一汁一菜程度であったが、最後までひもじい思いをしない程度の量であった。ただ、副食が次第に乏しくなり、菜っ葉の入ったカレー御飯という日が続くようになっていく。

午前中は、授業が行われた。国語、算数、歴史などの勉強が

主で、特別な教材が必要な理科や図工などはなかったと思う。習字はときどき練習した。自由課題で、「平和」と書いて、先生から注意された女の子がいた。

午後からは、授業の日もあったが、近くの畑を開墾して、甘藷(かんしょ)を植えたり、伊豆沼に菱の実を採りに行ったりしたこともあった。主食はなんとか確保されていたが、お八つが不足していたので、それを補うためであった。雨の日は室内で読書やゲームをして過ごした。S先生は将棋が強かったので、結構盛んに行われた。

夕食の後は、入浴など9時の就寝まで自由時間。時には幻灯が行われ、先生が幻灯機(註)を操作して、説明してくれたが、演目は戦意昂揚の物語が多く、生徒達の人気は、いまいちであった。

■ 砂糖とミルク入りのビスケット

冬が来た。町の篤志家の家庭に分散して訪問したことがあった。私は郵便局長の家に割り当てられた。その家には、東京から縁故疎開で来ていた小学生がいた。二人に橇(そり)を作って貰い、杉葉師の坂で滑ったりした。

皇后陛下から、御歌とお菓子を賜った。

つぎの世を背負うべき身をたくましく正しく伸びよ里に移りて頂いた菓子を胸に抱えて、男女別に部屋で記念撮影。昭和20(1945)年1月27日のことであった。御歌には曲もつけられていた。K先生のオルガンに合わせて、一同でよく歌った。今でも口ずさむことができる。お菓子は本物で、久しぶりに砂糖とミルクの味がするビスケットに、舌つづみを打ったことであつた。



昭和20(1945)年1月27日 皇后陛下より賜りたる菓子袋を手に記念撮影(前から2列目右から3番目が筆者)

春になると、東京の空襲が激しくなってきた。朝礼の時、先生から「誰々の家と誰々の家が焼けた」と告げられる日が、繰り返されるようになった。母校も5月25日の夜、烏有(うゆう)に帰した。

4月には、母校から1年生から6年生までの児童が、まとまって疎開してきた。町の料亭に收容され、「流れ寮」と名付けられた。妹も新1年生になったと同時に仲間入りをしてきた。

■ 終戦、そして帰京

やがて7月になると、頭上を艦載機が飛び交うようになった。町の西方に栗駒山という名峰が聳(そび)え、その麓に軍需工場と炭鉱があった。米軍機はその工場を爆撃するべく、築館の上を往復したのであつた。

8月15日、終戦の日の玉音放送(参照▶P20)は、昼食時、長机の前に座って聞いた。蝉の音がやかましく響き、玉音はよく聞きとれなかった。その夜から、電灯の覆いがはずされた。明るくなった部屋で、戦争が終わったことを実感したものである。

翌日が翌々日、昼間にB29(参照▶P20)が低空で飛来した。戦争は終わったのに、と眺めていると、栗駒山の麓に、パラシュートで何かを落としている。そこにあつた炭鉱に、米軍の捕虜收容所があつたので、救援物資を落としているのであつた。8月の末を待たずに、米軍が救出のためにジープでやって来た。疎開児童の宿泊している一角の離れに、米軍の将校が宿泊したので、一同声をひそめて夜を過ごしたものである。

10月、帰京の日がせまった。疎開の記念にと、宿舎の前に全員集合して、写真を撮った。旅館の関係者も加わって別れを惜しんだ。

11月初旬、再び夜行列車で、一同我が家への途を急いだ。今でも忘れられないのは、夜中に通過した仙台も、そして上野に着いた時も、目に入るの是一片の焼け野原であつたことである。

註 幻灯機:光源やレンズなどを使ってスクリーンに拡大して映す映写機の原型にあたる機械。学校や公共機関における視聴覚教育や、工場などで機器の使用法を説明するのに活用された。



ひもじさ、寂しさとの闘い、 学童疎開は子どもの戦争だった

小野寺 昭さん

昭和12(1937)年、目黒区に生まれ、3歳の頃に杉並区へ移る。

戦時中は杉並区新町(現・今川四丁目)で過ごす。終戦の年の春、7歳のときに宮城県登米町(とよままち/現・登米<とめ>市)に学童疎開し終戦を迎える。大学卒業後はNHK報道記者として勤め上げる。

平成7(1995)年、戦後50年の節目には登米町を親善訪問。

■ 北上川の河原で乾布摩擦

太平洋戦争終戦の年の昭和20(1945)年、私は桃井第四国民学校の2年生でした。井草八幡宮のそばに今もある桃井第四小学校です。場所も同じ所でした。

当時、東京の空襲(参照▶P18)も激しくなり、杉並区内の小中学生も親戚を頼っての縁故疎開(参照▶P18)や、学校から先生に連れられて地方に行く学童疎開をしていました。私は学校からの学童疎開組でした。終戦の年の春に、桃井第四国民学校の校庭に集合して、頭に日の丸の鉢巻きをしめて、身の回りの品を入れたリュックを背負い、先生に引率されて東北線の列車に乗って、宮城県登米町というところに行きました。落ち着いた先は町はずれにある龍源寺という寺でした。

私達の班は小学校2年生から6年生まで約50人、終戦の年の春から秋にかけて、龍源寺の本堂脇の小部屋で暮らしました。先生は庫裡(くり)で寝泊まりされていました。私達は毎朝、近くの北上川の河原に出かけ、手ぬぐいで身体をこする乾布摩擦や体操をしました。川を見ながら、「遠いところへ来てしまった。いつ東京に戻れるだろうか」と、とても寂しく感じたことを覚えています。

その時に戦争の勝利を願って、皆で唱和した歌が今でも思い出されます。その歌の一節に、「蹴落とせニミッツ、マッカーサー」と言ったような歌詞があったことを思い出して、この原稿を書くにあたって、この歌について調べてみました。

その結果、この歌は昭和19(1944)年3月に発表された「比島決戦の歌」だと分かりました。この歌の最後のほうに「…いざ来い、ニミッツ、マッカーサー、出てくりや地獄へ逆落とし…」となっており、まさしく私が北上川の河原で毎朝、歌っていた歌でした。ニミッツというのは当時のアメリカ太平洋艦隊の司令長官、マッカーサーというのは、有名な連合国軍最高司令官のことです。歌の作詞者は西条八十(さいじょうやそ)、作曲者が古関裕而(こせきゆうじ)でした。当代一流の作詞者と作曲者が、戦時中にこんな歌をつくり、小学生が毎朝、唱和していた時

代でした。

■ お供え物で空腹をしのご

学童疎開でのもう一つの思い出は食事のことでした。疎開先での食事は、芋などの代用食が多く、いつもお腹を空かせていました。空腹に耐えるということは、生易しいことではありません。

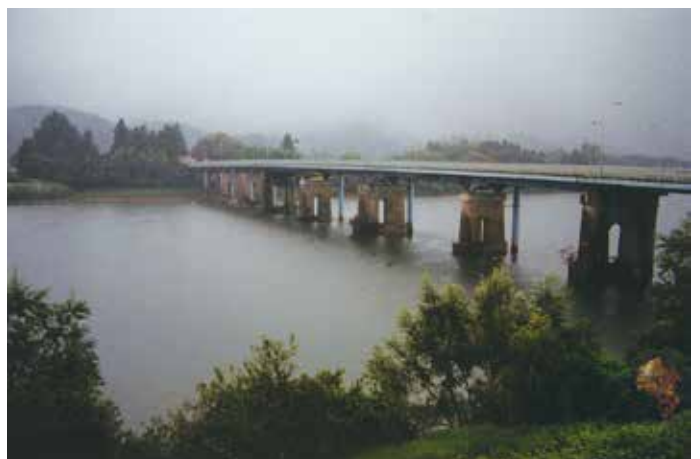
この龍源寺の本堂の裏は小山になっていて、中腹には広大な墓地がありました。お腹を空かせていた私達は、ひまを

見つけては墓地を隅から隅まで歩いて、お供え物を探して歩きました。そうすると何回に1回は、お供え物の饅頭などを見つけて、食べることができました。お墓の供え物ですから蠅がたかっていたはずですが、飢えには勝てません。

食べ物を見つけると本当に嬉しかった記憶が、今でも鮮明



疎開先の龍源寺(1995年親善訪問にて撮影)



乾布摩擦した北上川(1995年親善訪問にて撮影)

に残っています。こうして空腹を満たしながらなんとか生きてきました。

また集団生活では暴力が横行し、最年少だった私は、乱暴な上級生から殴られないように、たえず奮えながら暮らしていました。親元に帰る日の見通しも無く、辛い日々でした。

終戦の8月15日は、寺の境内で整列して玉音放送(参照▶P20)を聴きました。暑い晴れた日で蝉の鳴き声が響いていました。私には放送の意味が全く分かりませんでした。夜になって上級生から日本が戦争に負けたという話を聞きました。皆が泣いていました。私は何とも思いませんでしたが、泣かないと上級生から殴られると思って泣きました。

■ 戦後50年の再訪

終戦後、間もなく父親が東京から迎えにきました。小学校1年生で別の寮に收容されていた弟と一緒に、戦災に遭わなかった我が家に帰ってきました。その帰路、杉並区の高円寺付近など東京は一面の焼け野原になっていました。

当時の杉並区新町にあった自宅から、また桃井第四国民学校に通い始めましたが、自宅に戻ってから疎開先での習慣で、毎朝、家の廊下のふき掃除をしていました。そして、戦後の厳しい時代を生き抜いてきました。

私は今でも確かめたいと思っているのは、杉並区内の小学校は、東京から比較的近い長野に学童疎開したところが多かったと聞いています。なぜ、桃井第四国民学校と桃井第三国民学校が、遠い宮城県の登米町が疎開先になったのかが分かりません。おそらく、杉並区役所の当時の担当者が区内の小学校を適当に振り分けたからではないでしょうか。

当時、学童疎開した私達は、戦後50年たった平成7(1995)年に登米町を親善訪問しました。私達が暮らした龍源寺や町の様子、北上川も記憶通りであり変わっていませんでした。私達が寝泊まりした本堂脇の部屋の鴨居には、桃井第四国民学校と書かれた木の板が掛けられていました。それを見て



疎開先の小学校(1995年親善訪問にて撮影)

いと当時の辛い悲しい体験が蘇ってきました。

今、私と同居している孫娘は、桃井第四小学校の2年生です。学童疎開した当時の私と同じ年齢ですが、毎日何の心配も無く元気に学校に通っています。学童疎開で私達を引率された先生方も、私の両親もこの世にはおりません。

私も77歳、間もなく東冥の地に旅立つことになりますが、私が体験したような忌まわしい出来事が、二度と起こらないように願ってやみません。



開墾、水汲み、山羊のカレーライス

中村 清さん

昭和9(1934)年生まれ。大宮前六丁目(現・西荻南)、その後善福寺へ移る。

高井戸第四国民学校(現・高井戸第四小学校)を卒業し、進学。

卒業後は、工場の仕上げ組立工や製鉄会社、印刷会社などの工場でものづくりに関わる。

■ 離れ離れになる前の家族写真

私が生まれたのは、昭和9年(1934年)。杉並生まれ杉並育ちで、小学校は高井戸第四国民学校を卒業しました。父親は中島飛行機に勤めていました。父の話で覚えていることは、父が航空母艦「加賀」に乗ったことがあるということです。整備兵の扱いで、エンジン交換をしたと聞きました。駆逐艦で青島(チンタオ)まで行ったこともあると聞きました。船酔いでみんなゲゲー吐いていたそうです。父が土産にパイナップルを持ち帰り、生まれて初めて食べたことを思い出します。母は隣組(参照▶P18)の班長をしていて、防空頭巾(参照▶P17)をかぶり、防火訓練をよくやっていました。

私は、4歳上の兄と私の双子の弟、2歳下の妹の4人兄妹でした。戦争が激しくなる昭和18年頃、家の前で家族全員で写真を撮ったことがあります。離れ離れになる前の記念撮影だったのでしょう。兄は勤労働員で国分寺と国立の間にある南部機関砲の工場へ派遣されました。

昭和19(1944)年9月には学童集団疎開(参照▶P18)が決まり、私と弟の博は国民学校5年で集団疎開することになりました。高井戸第四国民学校の疎開先は宮城県の石森と佐沼でした。東北線のミニSLのような汽車に乗り、瀬峰という駅で降りました。男子は石森、女子は佐沼と分かれて疎開しました。宿泊先は、旅館、お寺、蚕を飼っている大きな農家でした。私と弟が泊まったのは旅館でした。

■ 空中にサツマイモがなっている!

疎開生活ではいつも空腹でした。お米が不足でジャガイモやカボチャの雑炊がほとんどでした。お盆やお彼岸の頃には、お寺のお供え物を盗んで食べたこともあります。芝栗を採りに行ったり、お寺の墓地の胡桃林で胡桃を採ったりしました。胡桃を枕に隠し、夜中にこっそりと石で割って食べたこともありました。林に入り、私だけが漆にかぶれて全身腫れ上がったこともありました。蔓に下がっているアケビを見た時には空中に

サツマイモがなっていると驚きました。地元の人が稲を収穫したときには「落穂拾い」をしていましたが、地元の人にやめるよう言われました。

蛇が赤ガエルを呑みこむところを見たこともあります。蛇も大切な食糧でした。地元の人が蛇の尾から皮をむき、串に刺して焼いたものを、フーフー言いながら食べました。先生の指示で痩せこけた山羊を殺したこともあります。それを解体してカレーライスに入れて食べました。

お正月のお呼ばれのことは楽しい記憶です。その地域の風習か、2、3人ずつ各家庭にお呼ばれし、クルミ餅や納豆餅、白いご飯をご馳走になったこともあります。夕方に行って一泊し、朝ごはんもいただいてお昼頃帰りました。

■ 畑仕事と騒ぎの日々

最初は勉強もしましたが、そのうち開墾が日課になりました。サツマイモはできない土地柄で、ジャガイモ畑を作りました。旅館の井戸の水汲みもやりました。つるべで水を汲み上げる仕事では一人30回も汲み上げました。井戸水はまっ茶色で、上のこしきで浄水して飲めるようにしました。田んぼに水を引くための運河を掘ったところ、泥炭層が見つかり、鋸で切って担いで旅館に持ち帰りました。乾かして達磨ストーブの燃料にしました。

家から離れた疎開は辛いもので、着いたその日、暗くなった頃「おかあちゃん、おかあちゃん」と廊下を走り回って大泣きしている低学年の子がいました。また集団登校の時、一人行方不明の子が見つかりました。探し回った末、駅に連絡をしたら、駅の待合所に座っている男の子を発見。自転車に乗せられて帰ってくるという事件もありました。

同じ学年に、暴れ者の問題児がいました。スズメバチの巣を取ろうとし、ハチに刺されて顔中腫れ上がらせて登校してきたり、仲間を集めて喧嘩騒ぎをしたり、いつももめごとを起こしては親が呼び出されている子でした。集団疎開は無理だろうと

涙なしでは語れない集団疎開の記憶

戦争体験の中でも、その当時小学生で、学童集団疎開を余儀なくされた方のお話は、現在の生活からは到底考えられない、辛く厳しい実体験が多かった。まだ子どもであったにもかかわらず、家族と離れ離れになり、見知らぬ土地での集団生活。ご苦労が多々あった中、当時の食生活は、飽食の現在からは想像を絶するもので、伺うだけで胸が痛んだ。

連れてきませんでした。戦争が激しくなり、そうもいわずに疎開してきました。

■ 8月15日も防空壕掘り

6年生の夏に終戦になりました。8月15日の午前も旅館近くで防空壕(参照▶P20)掘りをしていました。玉音放送(参照▶P20)は旅館の広間に集まって聞きました。よく聞き取れなかったのですが、担任の先生から「日本は負けた」と言われました。

終戦の3日後に、役場の人というアメリカ兵のMPを物陰から見た覚えがあります。アメリカ兵を見たのはその時が初めてでした。身体が大きく、赤鬼のような印象でした。その頃、男子は奴隷として連れ去られ、女子は連れ去られて強姦されるなどという噂が流れました。

東京に帰ったのは10月でした。新宿から中野くらいまで焼け野原でした。高井戸第四国民学校も全焼して校舎はありませんでした。疎開先の旅館で夕食の時に、担任の先生に長距離電話がかかってきて、「なに、全焼!？」と話していたのを覚えています。卒業式は桃井第三国民学校の校舎を借りて行いました。

高井戸小学校の2年生の時に、宮城県築館町に集団疎開した川端親子さんも、疎開中の食生活の記憶は今でも薄れない。「食事はいつも茶碗の底にご飯がある程度で、先生のお茶碗には茶碗の淵から少し見えるくらいご飯が盛られていて、いつも羨ましかったです。手紙を出す時には、封筒を閉じるためにご飯粒をもらうことができました。ご飯粒2粒もあれば封ができるので、残りのご飯粒を食べることができたのです。ご飯粒ほしさに、家族に宛てた手紙をたくさん書きました」と話す。

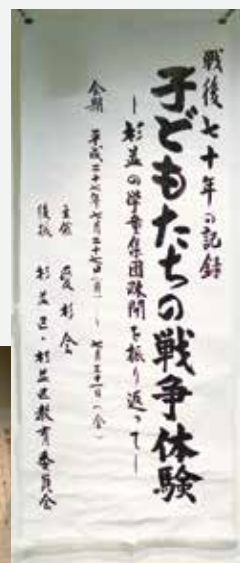


川端親子さん

米が不足して、イモやカボチャを代用し、さらに悪化すると、イモの葉や蔓、野草までを食べたという話も多かった。

この体験を、今の時代を生きる子どもたちに語り継いでいきたいと、平成27(2015)年7月「戦後70年の記録 子どもたちの戦争体験—杉並の学童疎開を振り返って—」の展示が愛杉会(あいさんかい)の主催で行われた。愛杉会は、杉並区立小・中学校で副校長以上の職にあった方と、杉並区・区教育委員会で課長以上の方で構成されている団体。当時、学童集団疎開を引率した先生の一人、久保田恵政さんが中心となり、疎開をした時の記憶や資料をまとめたものだった。当時の写真や図を用いて分かりやすく説明し、疎開した子どもたちの暮らしぶりを広く伝えた。

戦後80年、90年…時間の経過とともに、記憶は薄れていく。70年のような節目の年でなくとも、戦争がいかに悲惨なものであったかを伝える機会が、増えていくことを切に願う。



「戦後70年の記録 子どもたちの戦争体験—杉並の学童疎開を振り返って—」の展示のもよう
取材協力:川端親子さん
(取材:TFF)



集団疎開に先駆けて、富津学園へ

辰木 義武さん

昭和8(1933)年、宮城県仙台生まれ。軍人であった父の関東軍転属を機に満州へ。
小学校入学前に帰国し、高円寺へ移る。
大学卒業後、スチールギターの演奏家として、現在も音楽活動を続けている。

■ 戦時疎开学園「富津学園」へ

「出発!」引率の先生の号令一下、杉並区役所前に集合した小学生の団は、見送りの父母らとともに阿佐ヶ谷駅へと向かいました。途中両国駅で汽車ぼっばに乗り換え、大貫駅下車、目指すは千葉県君津郡富津町(現在の富津市)へ。

昭和18(1943)年、アリューシャン列島アッツ島守備隊の玉砕と共に、大東亜戦争戦況のひっ迫、米軍の日本本土空襲に備え、そろそろ学童の集団疎開(参照▶P18)が囁かれ始めた頃でした。

当時それに先立ち杉並区では、区内国民学校の3年から5年生までの希望者だけを集め、富津海岸にある杉並区の養護施設「富津学園」(註1)に試験的に疎開させました。たしか、昭和19(1944)年の春頃だったと思われます。杉並第六国民学校(現・杉並第六小学校)からは、5年生だった私を含めた男女5、6名だったと記憶しておりますが、これに参加しました。全員では100名くらいだったような気がします。引率、指導は桃井第一国民学校のご夫婦でお子さん連れの先生、お名前も失礼ながら思い出せません(註2)。なにしろ明日はどうかと混沌とした時代で名簿もなし、一葉の写真もなし、記録となるものはいっさい残っておらず、記憶は薄れてゆく一方です。

この場所は隣に木更津の海軍飛行場、目の前は横須賀の軍港と猿島の砲台。最も危険な軍事施

設のある東京湾のど真ん中で、なぜこんなところにといまだに疑問が解けません。私は危険を察知した両親の勤めで途中から縁故疎開に切り替えましたので、結局在籍したのは2か月くらいでしたが、私が去ったあと、間もなく全体が解散になったと聞きました。

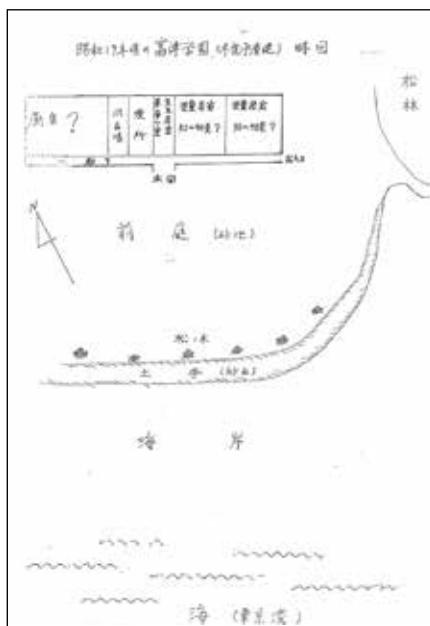
あの激動の時代ゆえ、その後の詳しい話はいまもまったく不明のままです。当時の児童たちもいまや80歳前後、でもまだご健在の方も多数おられると推察いたします。

■ 地引網に五右衛門風呂

話は前後しますが、当初は臨海学校気分でした子どもたちも、到着後2、3日たつと低学年の女の子たちが夜中にしくしく、めそめそ始まりました。一番つらかったのはやはり空腹。南瓜の混じったべちゃべちゃのごはんに味噌汁とおかず一品、たまにみんなで地元漁師の地引網を手伝ったときは豪華な尾頭付き。よく友達が大事に持っていたお寿司の匂いがしみついた包み紙を、かわるがわる匂いをかいでは目を細め、密かに楽しんでたことが懐かしく思い出されます。

また、毎日をどう過ごしたかあまり思い出せず、授業をたまに受けたような気はします。海岸のため、井戸の生水はそのまま飲めず、いったん煮沸して薬品を入れて白っぽく濁った湯冷ましを午前午後、湯のみで2杯ずつだったと思います。

学園から5、6分歩いたところに「万福寺」というお寺があり、そこのお風呂に交代で入れていただいていた。小さな五右衛門風呂で、子どもでも3人入れればギウギウ、最後の頃にはお湯もドロドロになっていました。それも週に1、2回くらいだったかな。また、お寺の離れを面会所としてお借りしており、ある面会日に来た両親が私の顔を見てびっくり、出していただいたお茶に父親がハンカチを浸し、垢をボロボロとこすってくれました。毎日の洗面や洗濯はどうやっていたのか、さっぱり思い出せません。



自筆の当時の富津学園周辺図

疎開先との戦後の交流

学童疎開が縁で、お世話になった疎開先の方々と、学校として交流を続けた例がある。杉並第三小学校の事例を石原さん、金井さんに、同じく高井戸第三小学校の事例を、元高井戸第三小学校校長の大石さんにお聞きした。

■杉並第三小学校

「交流のきっかけは、平成6（1994）年の集団疎開50年目に、旧疎開学童有志が、疎開先の吉岡小学校（宮城県黒川郡大和町）を訪問した際、皆の心に湧き出た吉岡に恩返しをしようという気運でした」と当時を振り返る石原さん。平成14（2002）年の杉並第三小学校創立110周年祝賀会に、吉岡小学校の先生方をお招きした際、影山校長先生から杉三小の山崎校長先生に「今の子どもたちは学童疎開のことを知りませんので、体験談を話して下さいませんか」と要請され、翌年から年に一度計6回、吉岡小学校で講演を行ったという。また、6回目の平成21年には、両校で交流を記念して交換植樹も行っている。教員が互いに訪問しあって、研修会を開いたこともあったとのこと。

杉三小では、毎年「杉っ子まつり」の際に大和町の物産展を開いて好評を博しており、今後も、ずっと継続してほしいものだ。



吉岡小で学童疎開のようすを説明する石原さん

■高井戸第三小学校

昭和62（1987）年、松田杉並区長（当時）のもとに栗駒町（現・宮城県栗原市）からの要請があり、「栗駒杉並チビッコ交歓会」として交流会が始まったという。当初は、高井戸第三小学校が栗駒町を訪問していたが、平成6（1994）年、学童疎開50周年記念行事を機に、毎年相互に訪問しあう2泊3日の宿泊行事「杉並・栗駒児童交歓会」に発展したとのこと。また、PTAや地域の方々の協力によるバザーも実施された。

交歓会は、「主催は実行委員会、児童は希望参加方式でしたが、歓迎会にはそれぞれの首長や教育長が出席され、温かく迎えてくださいました。児童は、農村や都会ならではの様々な行事を楽しむとともに平和の大切さを学び、貴重な体験ができたと思います。児童の笑顔や別れを惜しむ姿が忘れられません」と当時を懐かしむ大石さん。

残念ながら、平成20（2008）年の岩手・宮城内陸地震により、宿泊先として利用していた温泉施設などが埋没してしまい、中断して現在に至っている。しかし、「今後は、学童疎開の歴史を伝え、生活の場・学習の場を通して様々な交流が続いていくことを心から願っています」と大石さん。

取材協力：石原隆良さん、金井桑さん、久保田恵政さん、大石禎子さん
（取材：野見山肇）

■埋もれさせたくない記憶

女の子は前庭でよく女の先生に髪の毛についた虱（しらみ）を取ってもらっていました。男の子は裏山で捕まえた蛇を食べたとか食べなかったとか、家から送ってきた何かをみんなが寝静まった夜中にひとりごそごそ食べたり、ハミガキ粉を甘くておいしいとお菓子のつもりで舐めたりしていました。いずれもひもじさのなせる業（わざ）で、いまの子どもたちには想像すらできないでしょうね。なにしろ、「米英撃滅」、「欲しがりません勝つまでは」に燃えていた小国民。空腹以外はさほど苦痛に感じませんでした。

そうはいつでも食べ物に飢えていた私は、高崎に暮らす親戚のことを思い出し、あそこに行けば食べ物があると、家族にあてた葉書に「高崎にもよろしく」と記しました。先生の検閲もあったので直接的な言い方はできませんでしたが、おそらく両親は読みとってくれたのでしょう。先に書いた通り、高崎へ疎開先を移すことになりました。

先年、家族で館山までドライブした帰り、万福寺に寄ってみました。本堂以外は建て替えられており、当時のことをご存知の方は誰もおられませんでした。そりゃそうですよね。あれから70年ですもの。また富津学園の入り口は鎖がはられ、立ち入り禁止の札が。海岸だけが変わらず、コンクリートのポンプ小屋も昔のまま、独り感慨にふけりました。

いずれの疎開先でも、当時子どもたちは似たり寄つたりの生活だったと思いますが、その前に、杉並区では、このようなことがあったということをおま埋もれさせたくなく、記憶の片隅にでも残していただければ幸甚と思い、これを記してみました。

註1 東京都は国の学童集団疎開に先んじて、養護学園等の施設を利用して「戦時疎開学園」を設置し、希望を募って一部の児童を疎開させた。富津学園はそのひとつ。

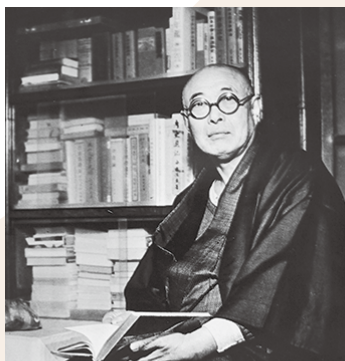
註2 富津学園に疎開した児童数は137名。桃井第一国民学校の矢田部先生が夫妻、子ども連れて副園長として赴いた。

杉並の文化人と戦争

戦前より、杉並には多くの文化人が暮らしていた。
空襲被害、怒りをぶつけた日記。
戦時中、彼らは何を見、何を思ったのか。

『あぶない。にげよう』

『[赤いろそくと人魚]をつかった小川未明』 岡上鈴江 (ゆまに書房)



写真提供: 上越市小川未明文学館
<プロフィール>

小川未明 おがわみめい

明治15(1882)年、新潟県出身。小説家・児童文学作家。「日本のアンデルセン」「日本児童文学の父」と呼ばれる。昭和5(1930)年、48歳の時に高円寺に移り住み、昭和36(1961)年、79歳で亡くなるまで暮らす。

代表作『赤い蠟燭と人魚』をはじめ、多くの作品を残した児童文学作家・小川未明。昭和5(1930)年より生涯を高円寺で暮らし、近隣の人々から「高円寺の先生」と親しまれた。戦時中も疎開せず自宅に居り、昭和20(1945)年5月25日の空襲を受けた。未明の娘で児童文学者の岡上鈴江氏著の本作に、家族で避難した様子が書かれている。



『あぶない。にげよう』

防空ずきんにもんぺ姿の父は母をつれて私の家の前へくると、緊張した顔で私たちにいった。

主人と私はふとんを包み防空壕の

中に放りこむと、身のまわりのものを小さな柳行李に押しこみ、あわてて父のあとにしたがった。

隣町が燃えてその煙が風で押しながされてくる中を、私たちは目をこすりながら、南の方に向かって歩いた。」

「そのとき、ふとうしろをふりかえった父は、主人が行李をかつぎ、私がつうしろから押さえているのを見ると、いきなり大声でどなった。

『ばっか、そんなものをかついで逃げられるか。物欲のつよい奴は逃げられんぞ』

私たちはあわてて行李を道ばたに投げすてて、父のあとを追った。」

戦中戦後、子どもたちのために作品を書き続けた小川未明。「僕はこれからだ」「戦友」(昭和17年)、「考えこじき」「兄の声」「戦争はぼくをおとなにした」(昭和24年)など、戦争をテーマにしたものも多く、未明の戦争に対する思いを読み取ることができる。

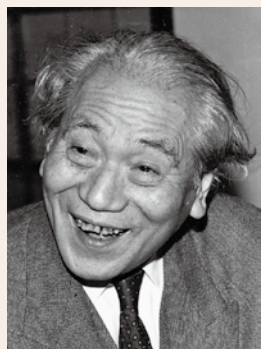
『夢声戦争日記』全7巻 徳川夢声 (中公文庫)



<プロフィール>

徳川夢声 とくがわむせい

明治27(1894)年、島根県出身、東京育ち。新宿武蔵野館の活動写真弁士として人気を博し、漫談家、作家、俳優、声優、文筆家と様々な分野で活躍。昭和2(1927)年より亡くなるまで天沼で暮らし、地域のまとめ役としての役割も果たした。



写真提供: 中央公論新社

怒りがぶつけられる

活弁士・徳川夢声による昭和16(1941)年から昭和20(1945)年までの日記を、戦後に再編集したもの。

徳川夢声は昭和2(1927)年より、天沼で家族と暮らしていた。戦時中も劇場や慰問先での公演、ラジオの仕事などをしながら、休日には自宅の庭で畑仕事に精を出していた。

空襲が激しくなると街並みや生活が一変し、日記にも怒りがぶつけられる。戦況や空襲被害、食事情など日々の生活が詳細に書かれた本書は、当時の杉並の様子や人々の暮らしぶりがわかる貴重な資料にもなっている。